



第21回 スイス・西オーストリア エコバウ建築ツアー2017
持続可能な木造 省エネの住宅・公共建築と建築デザインの旅
主催 エコバウ建築ツアー実行委員会

(株)イケダコーポレーション 仙台・東京・名古屋・大阪・広島・福岡

〒553-0003 大阪府大阪市福島区福島4丁目8-28 FJビル3F TEL06-6452-9377 FAX06-6452-9378
〒104-0045 東京都中央区築地7丁目10-2 築地小川ビル4F TEL03-3544-4453 FAX03-3544-4450

☎0120-544-453 URL <http://www.iskcorp.com> E-mail info@iskcorp.com



エコバウ建築紀行

エコバウ建築ツアー スイス・西オーストリア

『バウビオロギー』が息づく 木造・省エネ建築を体感する旅



第21回 スイス・西オーストリア エコバウ建築ツアー2017

Eco-bau Tour 2017 Switzerland & West Austria 2017.9.17(SUN)-9.25(MON)



第21回エコバウ建築ツアー2017(主催 イケダコーポレーション)は、改めてバウビオロギーについて考える機会を私に与えてくれた、貴重な旅となった。タイトルに「エコバウ」と謳っているものの、実際には「バウビオロギー」の研修であり、ドイツで言うところの「パッシブハウス基準」とスイスの「ミネルギー基準」の実態見学であった。

強い印象がいまだに残っていることがいくつかある。ひとつは「バウビオロギー」についての考え方が、日本とはまったくといっていいほど違っていたこと。そして、それが環境負荷に対する基準に直結していること。さらには環境に対する住民の意識が違っていたことなどであった。



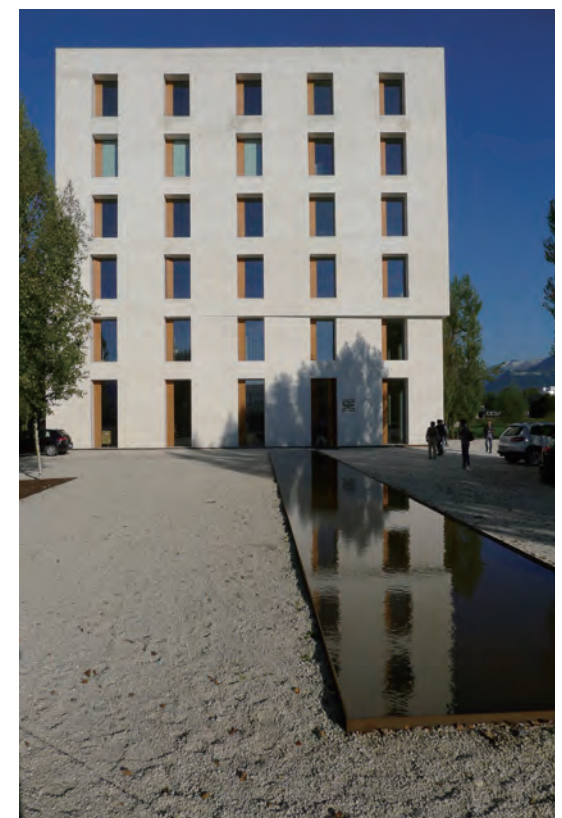
持続可能な建築 建材の評価とランキング

すでにヨーロッパでは定着している「BAUBIOLOGIE-バウビオロギー」という言葉が、環境に対する基本的な姿勢を集約している。もともとドイツ語の「Bau」「Bio(生命)」「Logos(論理・学問)」を組み合わせた造語で、日本では建築生態学と訳されている。ところが「Bau」はバウハウスのバウだから建築であろう、などと考えるのは大間違い。建築はドイツ語でも「Architektur」であって「Bau」は建設を意味する。つまり、空間だとかコンセプトだとかで語るものではなく、いかに建設するかであって純粋に技術的にとらえた言葉である。そして、ドイツでは「パッシブハウス基準」、スイスでは「ミネルギー基準」として定着しており、そこでは具体的な建設方法や使われている建築部材が断熱性能を担保する基準とともに、いかに生態系に対しても配慮されているかが問われるのである。

断熱性能等の具体的な数値についてはかなり技術的な領域であり、解説も煩雑になるのでここでは触れまい。

建設に関わる側面に限って、西オーストリア、ドルンビル市のエネルギー研究所フォアアールベルクで聞いた話を採り上げてみよう。具体的に言えば、建設時に、土地に対してどれだけの変化を与えたか、それが環境に及ぼす影響はどうか、建築部材についても原料の採取方法から加工、製品化の過程でどれだけCO₂を排出したか、どれだけの距離を運んだかなど、ライフサイクルアセスメント(LCA)に沿ってすべての項目が審査され、ランクが付けられる。そのために必要な資料の提出がメーカーには義務付けられている。そして建物の建設方法や使用される部材それぞれのランクが総合されて、最終的には5段階にランキングされる。そして評価の高い方がより多くの補助金を得られる。補助金は州政府から支給されるのだから税金で賄われる仕組みである。このようなシステムと基準が欧州各国で適用されているのだ。いずれの基準も国が策定している基準よりも厳しいものであるが、国の基準が守るべき最低限のものであるのに対し、望ましい基準として設けられたのが「パッシブハウス基準」や「ミネルギー基準」なのである。しかも民間が設けたこの基準をベースとして、州政府が補助金を支給するという、まさに官民一体になって推進している環境運動である。

では、日本の現状はどうか、2020年に実施される予定の新省エネ基準にも、それ以前の基準にも、ここまでの徹底さはなく、あくまでもひとつの建物に限定された範囲での省エネ性能を担保するのが目的であるが、スイスやドイツの基準と比べるとぬるま湯のようであり、しかも生態学的な発想はまったく欠如していると思われる。エネルギー研究所で評価システムの話聞いたときに、いちばん関心を持ったのが、『ランキング認定しているのはどのような組織なのか?』であった。はたして政府が管掌する行政なのか、はたまた第三セクターのようなものなのか。実際には個人が始めた民間の組織であった。もともとはひとりのエネルギー研究者がコンサルタントとして活動を始めたものが、増大する需要に対応しきれなくなり、組織化したのだという。今では活動範囲は全ヨーロッパに広がっている。ランキングの内容はすべて公表されており、詳細な数値が裏付けとなっているから忖度の余地などまったくなくて信頼度が高い。だからこそ欧州で取り組む持続可能な建築のサステナブル評価のスタンダードとして定着したのであろう。



もうひとつの重要なポイントとして、住民たちの環境に対する意識の高さである。これはバウビオロギーの定着とも密接に関係しているように思われる。ドイツの「パッシブハウス」、スイスの「ミネルギー」と呼ばれる厳しい基準の元で建てられた建築が、どのような建物で、そしてどのような町を形づくっているのか、その背景にはどのような思想があるか?

私がツアーで感じ得たことを、私情を交えながらレポートしてみよう。



LCAに沿って評価された建材のデータベース「baubook」
省エネルギー建築のコンサルタント・育成「エネルギー研究所フォアアールベルク」

エネルギー研究所では、省エネで持続可能な建築の普及を目的に、建材の生産・施工・使用・廃棄に至るLCAに沿って全てのエネルギー量を可視化・データベース化した「Baubook」を発刊している。

オフィスビル2226 館(オーストリア)
躯体の性能を高め、暖房、換気、冷房のシステムを排除したミニマムエネルギーオフィスビル

スイス チューリッヒへ

成田空港に集合したものの、かなりの混雑でチェックインに手間取り、用意されたラウンジで初めて成田組が勢ぞろいして簡単なミーティング。そして出国審査から搭乗まであわただしく時間が過ぎた。乗ってしまえばあとは到着まですることもなく、内側の席なので外も見えず、ただひたすら映画を見るばかり。日本では封切り前の作品やら旧作でも人気の作品がオンデマンドで鑑賞できたのはせめてもの暇潰し。結局4本立てと相成った。



到着したチューリッヒの夕暮れ時は雨。ここで関空組と合流して西に向かい、暮れ始めた風景を雨に濡れた窓越しに眺めながらAarau近郊のホテル、Aarehofに到着。

割り当てられた部屋に入ると、なかなか快適な雰囲気で落ち着く。机の下を見るとラジエータがあり温水暖房と知る。エアコンとは全く違う体感。

これから訪れるエコバウ建築が楽しみである。そんな期待を持ちながら、ホテルのバンケットというにはチョト寂しいが、名刺交換を兼ねたウェルカムパーティが開かれた。すでに知り合っているグループもあるようだが、さすがにみな大人。それぞれに挨拶を交わす。この日は早々に皆が部屋に戻った模様。



Kindergarten Muntlix
オーストリア ムントリックス村の木造エコ幼稚園

第21回 スイス・西オーストリア エコバウ建築ツアー2017 日程表 2017.9.17.sun -9.25.mon

日付	場所(通訳)	プログラム
9/17(日)	NRT(成田) KIX(関空)	成田・関空から出発～スイス チューリッヒ空港へ ホテル到着後 ウェルカムパーティ 泊:レンツブルク近郊
9/18(月)	レンツブルク	■ スイス漆喰 新工場の視察 ■ スイス漆喰の戸建て・集合住宅視察 泊:レンツブルク近郊
9/19(火)	レンツブルク	■ スイス観光 ■ ヴィンタトゥール市の持続可能な 集合住宅地 キーセライ訪問 泊:ザンクトガレン近郊
9/20(水)	ユーバーリンゲン フレゲンツ	■ ベルヒトルド木造会社 ハイエンドな木造エコ・省エネ建築のビルダー ■ 木造エコ・省エネ改修事例 建築家クリストフ・カルプ氏 ■ ドイツ・ユーバーリンゲン市 シュタイナー学校 (シュタイナー建築)視察 泊:フレゲンツ近郊
9/21(木)	クルムバッハ ドルンビルン	■ クルムバッハ村の木造 省エネ・エコ建築による持続可能な村づくり 著名建築家ヘルマン・カウフマン ヘルナルド・バーター氏 集合住宅・公共建築 ■ ドルンビルン市 木造ハイブリッドビル建築 LCT-One視察 ヘルマン・カウフマン事務所設計 ■ ドルンビルン市 エネルギー研究所フォーアールベルク 「フォーアールベルク州における持続可能な エコ建築の推進」 泊:フレゲンツ近郊
9/22(金)	ムントリックス フォンタナス ウルネーシュ	■ ムントリックス村の木造エコ幼稚園と庁舎の省エネ改修 2015年オーストリア建築・持続可能性受賞作品 ■ アルプス地方、ミネルギー・P・エコの戸建て住宅視察 建築家トーマス・メツラー氏 泊:ヴィンタトゥール近郊
9/23(土)	ヴィンタトゥール スール チューリッヒ	■ ヴィンタトゥール市 観光(コープ・ホームセンター) ■ スール市 住宅展示場 Home Expo見学 ■ 自由行動 チューリッヒ市内 泊:チューリッヒ近郊
9/24(日)	チューリッヒ	■ チューリッヒ空港～成田・関空へ 25日(月)朝到着 成田・関空

※ ツアープログラムは諸事情により、変更する場合がございます。予めご了承ください。



第21回 スイス・西オーストリア エコバウ建築ツアー2017

—持続可能な木造 省エネの住宅・公共建築と建築デザインの旅—



zum Bauernhof
(スイス ガストホフ・ツム・パウエルンホフ)



バウビオロギーの思想に根ざして 生まれる建築と素材

一夜明けて18日の月曜日。暑苦しい東京から比べるとかなり涼しく、曇りがちとはいえ雨上がりの朝は爽やか。とりえずホテルの周辺をうろつく。ホテルから100m足らずでWildeggという鉄道駅。「野生の卵か」などと早とちりしたが、ヴィルトエック、あるいはヴィルトエックと読むのであろう。

ホテルを出発し予定通りに視察先に到着。周辺は畑で朝露か雨の名残か、照り始めた太陽に燦めいている。スイス漆喰メーカーの社長の案内で、原材料から製品としてのカルクウォールやカルクファサード製造プロセスなどの説明を受け、多様な施工サンプルを見学。

純度が高いほど石灰岩の色は純白に近く、純度が低いと黄灰色が濃くなること、下地と仕上げの関係などまで、実に詳細丁寧な説明。

2時間ほど工場やオフィスの内外を見て回り、社長ともども30分ほど離れたオーバーリンクホーフェン村のホテル・レストラン「ガストホフ・ツム・パウエルンホフ」に移動。100年前に建てられ廃屋のようだった農家をホテル・レストランに再生したもので、客室内部やレストランなど古材を現わしにして落ち着いた雰囲気客室やレストランが出来上がっている。このレストランのランチに出された地元の白ワインは絶品。今回の滞在中、赤白含めていろいろとワインをいただいたが、ここのものがいつまでも心に残った。



新築住宅「Aqua Haus」へ移動し、迎えてくれたのは女性建築家、Franziska Judさん。まずは事務所で簡単なレクチャーを受け、事務所のすぐ裏手に建てられたAqua Hausへ。自然を感じながら自然とともに暮らしたいというJudさんが設計した住宅である。CLTのようにラミナを重ねてはいるが接着剤は使わず木のダボで止めている厚み40cm以上壁をパネル化したもので躯体を構成。梁は集成材だが部分的に強度が高く色も違うラミナを使い、まるで肘木のように見える。雨水を屋根の上に敷いた土でろし、庭の池も蓄水槽とし、さらに全体を循環させるという徹底した手法が採用されている。トリプルガラスにもかかわらず、猫ちゃん専用通路があるのは驚き。

周辺ではさまざまな建設工事が続いているが、この一角はJudさんが全体計画をしており、今後どのような街ができるのか、期待は大きい。

次に訪ねた住宅は1903年に建てられ、文化財として保存対象となっている家を改修・修復したものだ。修復にあたって壁面や天井を剥がしたところ、壁紙の裏にはカビが生えていたが、天井からは塗料で隠れていた天井画が現われた。天井画を修復したのは当然のこと。改修は基本的な断熱性能のアップと熱源の交換であった。

かなり広い住宅地にあり、隣もほとんど同じ外観の住宅であることから、1903年に開発された住宅団地であろうことが予測されるし、その通りであった。しかし、たまたま隣り合った2棟が残ったのも不思議といえば不思議だが、楽しい話である。

文化財として保存対象の建物を修復してそこに住む。まず日本では考えられないような話だ。ここには小さな子ども3人を含む5人の家族が住んでいた。

だいぶ長い時間お邪魔していたような気がする。それほど居心地がよい家だった。これら2軒の住宅にはたっぷりとスイス漆喰 カルクウォールが用いられていたのは当然のこと。



ミネルギー・P・エコ集合住宅 住民たちが作る持続可能なコミュニティ

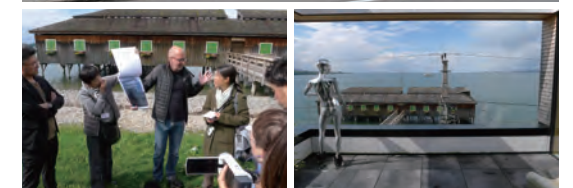
ツアー2日目はツアー中、唯一の観光である雪のピラトゥス山とルツェルン湖で船上の昼食を楽しんだ後、東スイス ヴィンタートゥール市の持続可能な集合住宅ギーセライを訪問。まず緑の芝生の向こうに横たわる外観の紫色に一瞬たじろぐ。木造RCのハイブリッド6階建ての151世帯が入居する集合住宅で、地域熱供給システム、住民のための集会所、ランドリー、店舗など生活に必要な施設を内部にほとんど網羅している。そして仕様はスイスの「ミネルギー・P・エコ」という省エネ建築の最高基準に認定されている。外壁に設けられた緑色の木製縦型ルーバーは横方向に移動可能で、過剰になる熱射を防ぐため、陽の動きに合わせて稼働する。幸いなことに個人の住居を見学させていただく機会を得た。決して広くはないが、家具の選択や配置、照明器具

やその位置など、住まい手のセンスが感じられる、居心地のよい部屋であった。

住棟に囲まれた中庭には子どもの遊具が所狭しと並んでいるが、すべて住民達の手造り。そのためだけでなくDIYなど趣味にも利用できる工房も工具類も完備している。

持続可能なコミュニティがここにはある。すべてのことは住民が話し合っで決める。そしてベランダには隔壁がない。往来が自由なのである。プライバシーはどうかの質問には、とくに問題になってはいないが、やはり嫌がる人もいる。そのときはベランダに鉢植えを置くことによって通行お断りの合図とすること。緩い規則だが守られることによって意味を持つてくる。

現在、背後に新しい棟が建設中であり、そこもミネルギー・P・エコ相当の建物になるはずである。

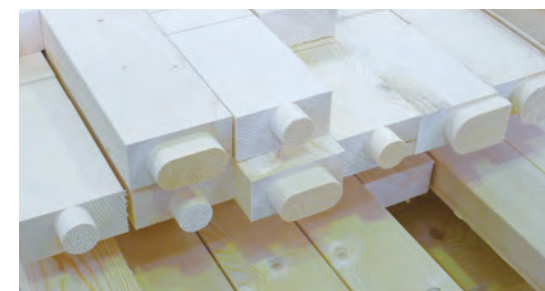


地場工務店が建てる省エネ・木造住宅

ツアー3日目、これからボーデン湖に沿って西オーストリアへ移動だ。雨がちだったが、だんだんと雲が薄くなってきたものの雨は降り止まない。1時間以上走り、道に迷い、それでも何とかベルヒトルフォ木造会社に到着した頃には多少小降りになった。

人家もまばらな一帯だが大きいビルもちらほら。日本で言えば地方都市の近郊といった風景か。そこに小ぶりながら2階建て、設計部門、加工部門を備えた、ハイエンドな木造・省エネ・エコ建築の工務店がある。もちろん木造である。設計室から工場が見渡せる。工場では壁や床スラブのような大型のものから間仕切りや下地パネル、造作までが製作されている。

本社のほど近くで施工中の現場を見学した。構法は基本的にはパネル構法である。壁、屋根などのスラブを自社工場で作成して現場で組み立てるから、工期がかなり短縮されるし施工工程の段取りもしやすい。



木造エコ・省エネ改修 エネルギーをコントロールする

昼食を挟んで訪れたのはブレゲンツ市の建築家クリストフ・カルプ氏の自邸で、ボーデン湖畔に沿って走る鉄道の線路脇に建っていた古い木造家屋を改修したもの。この頃には空は晴れ渡り、湖もきれいに見渡すことができた。

既存の木造構造の躯体を遺したままの改修だから解体して新築するよりミネルギー・ポイントは高い。そして何より驚いたのは、使っている薪ストーブの熱量計算をしていたこと。8kcalのうち温水に6kcal、暖房に2kcalを利用しているのだという。太陽熱、燃焼エネルギーを何から何まで電気に変えるのではなく、まず熱エネルギーとして利用する。欧州の住宅は直接的な利用法も多い。使用するエネルギーの種類を集約することのメリットはある。しかし分散したほうが有利なこともある。熱がいい例だ。断熱はあくまでもそこにある熱量を保存するための方法。部屋を暖めるためにエアコンを使うのではなく、薪を使って火を灯す。炎の揺らぎは癒しの効果もある。一方で排煙、新鮮な空気の供給が必要だし、火事や一酸化中毒の危険性もある。それを承知の上でどうするか。そこに知恵を働かせる必要がある。どうやら日本はすべてを電気に頼っている。

気象条件などの自然環境とどのように付き合っていくのか。どこまで生活環境を守るのか。私たちを取り巻く自然環境・自然エネルギーを無視して考えてはいけない。

自然に寄り添う心 人智学の教え

南ドイツへ足を伸ばし、ウーパーリングゲンのシュタイナー学校の見学へ。シュタイナーは日本でも教育の場で取り上げられている。建築でも何人か取り組んでいる人たちがいる。初めてスイスのドルナッハを訪れたのは1975年だが、ルドルフ・シュタイナーが設計した

ゲーテアヌムを見たときの印象は忘れられない。言葉で表現するのは不可能なので何も言うまい。当時説明してくれた、見るからに哲学者の風貌を身に纏った方に案内していただいた。



Waldorfschule Überlingen
シュタイナーズクール(ドイツ ウーバーリングゲ)



直角は自然界にはありません。だからここでは直角をできる限り排除しています。二度目に訪れたのは1999年だが、そのときにも彼は健在で内部まで案内してくれた。廊下には印象派の点描のようにピンクの色が塗られていた。「目をつぶると補色の緑が見えます。緑は心を休めるが、直接ではなく間接的なほうがいいのです。」という説明だった。

第一次大戦の前後というヨーロッパ激動の時代にあって、シュタイナーは自然とのつながりを大切にしていた。根源的なものを探し求めていたと思う。その姿勢こそシュタイナー教育が果たすべき役割ではないか。そんなことを思い出しながら見て回る。



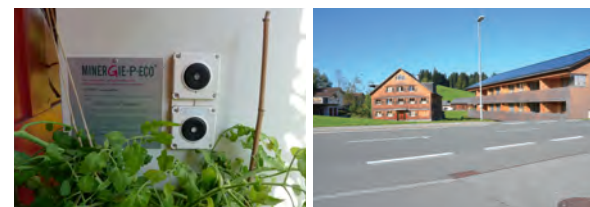
クルムバッハ村にある木造のバス停
(設計 ヘルマン カウフマン)

フォアアールベルク州が取り組む 地場木材で建てる省エネ・木造建築

ツアー4日目、ホテルを出発し、クルムバッハ村へ。予備知識なしに訪れたところが、思いっきりぶん殴られた感じ。道中も劇的。丘の上のシャトー、霧の中の牧場、山並み。これがフォアアールベルクか！

山間部の小さな村で人口1,000人ほど。パッシブハウス基準に則って集合住宅を数棟建て、さらに公共建築を断熱改修するなど、環境問題に対する取り組みが話題となっている村だ。

現地で説明してくれた若い村長によれば、現在村の中心部に高齢者を集めているとのこと。農業と林業を生業とするこの村では、広い範囲に民家が散在している。ここでも高齢化が進み、高齢者福祉の面からも村の中心部に集まってもらいたい。そのため最高ランクの集合住宅建設を進めている。この村でも戸建て志向はあって、若い人たちは自分たちの家が欲しい。そこで、高齢者が中心部の集合住宅に引っ越して空き家になった家を若い人たちに使ってもらうという方法を採用入れた。パウピオロジーの観点からも、更地に建物を建てるより改修の方がランクが上がるので都合がよい。スイスのミネルギー基準では、評価によって20cm角くらいのメタルプレートが授与される。いくつかの建物を見学したが、評価の高い建物は誇らしく玄関脇にこのプレートが飾られている。



美しい景観を後にし、ドルンビルン市へ移動。ヘルマン カウフマン設計のLCT-Oneを訪問。昨今注目を浴びているカナダ・バンクーバーの18階建ての木造ドミトリーは、オーストリア出身の建築家ヘルマン カウフマンが設計した。彼の事務所はフォアアールベルク州にある。

現在、この地域には中高層の木造建築が複数建てられ、世界各国から見学者が訪れている。ヘルマン カウフマン設のオフィスビル「LCT-One(ライフサイクルタワーワン)」は有名企業の集まるドルンビルン市内企業団地にある。8階建てで、鉄筋コンクリート(RC)造のコアと木製の梁・柱、RC床を組み合わせたハイブリッド構造。徹底したライフサイクルコストの削減と、ゼロエネ化のためにさまざまな工夫が盛り込まれた。カウフマンは同じシステムで20階建てまで建てられると発表している。

重要なのは「LCT-One」を中心に、この地域でエネルギーが循環するというコンセプトだ。森から材木を搬入し、製材してこの建物をつくり、余った部分はチップにして地域暖房に使う。この建物を解体するときは、廃材をリサイクルして再利用する計画だという。



自然と調和する省エネ・木造建築とデザイン

ツアー4日目、ホテルを出発し、ムントリックス村へ。クルムバッハ村同様に、ムントリックス村も村役場を中心に教会やコミュニティ施設、介護付き老人施設などを集約している。村役場庁舎は築100年ほどの石造だった庁舎をリノベーションしたもので、最上階の会議室には以前の小屋組が露出されていて歴史を感じさせる。ムントリックス村庁舎に隣接する幼稚園は、庁舎と一体的に計画されており、設備関係の機器は幼稚園の地下に設置してあり、地熱を利用した地域熱供給システムの拠点となっている。単純な箱形の外観だが木の縦桟で囲んだおかげか、スケール感のせいか、なんとなく親しみが持てて心地よい。前には枯れ木が置かれていて、子どもたちの遊具となっているのが楽しい。ここで何よりも驚いた

のが、1階も2階も、床に版築が用いられていたこと。日本だったら完璧にフラットにしたらどう。ここでは多少の不陸があり、所々に石が嵌め込まれている。版築は土を何度も突き固めてつくるので手間暇がかかる作業であるが、表情としては自然の大地がそのまま園内に入ってきたように思わせる。そして、同時に修学院離宮上御茶屋の三和土を想起させた。蛇足ながら、ブータンでは民家の壁に版築を使っていた。

幼稚園の床には床暖房が仕込まれており、見学に来たわれわれも園児たちも裸足で気持ちよく歩き回っていた。幼稚園と村役場庁舎、いずれもパッシブハウス・プラスエネルギーであり、2015年のオーストリア建築・持続可能性賞の受賞作品である。



1. 村の庁舎は1937年の建物を改修。新築に比べCO₂を約60%削減できる。市民への配慮として、外観はあまり手を加えずそのままの状態を残し、建物を1m低くすることで市民と視線を合わせやすくする工夫がある。
2. 室内は柱などの躯体を残し断熱改修を施し、空間はフレキシブルな間取りに変更している。
3. 木製ファサードには、柱の側面ごとに色が塗り分けてあり、正面・右・左と見る方向によって色が変化する仕掛けも。
4. 幼稚園の床には版築が施してあり、子供たちが触れるものには「自然との繋がり」が感じられる。



フォンタナス村の住宅から見る美しい山並み



フォンタナス村へ移動し、建築家トーマス・メッツラーによる山地の美しいミネルギー・P・エコ住宅建築を見学。エクサー邸はミネルギー・P・エコ住宅という最高ランクを受けた住宅で工費が1億7千万円。日本ではかなりの豪邸となるが、訪れた印象では明るく開放的だがそれほど豪華さは感じられず、居心地の良さが印象的だった。物価がかなり日本より高いので直接的に比較できないが、それだけ費用をかけることは環境に配慮するためには当然だという雰囲気です。そこに、自分の家を建てる場合でも環境に配慮することは当然であるとする住民意識を感じる事ができた。



なぜ、日本ではバウビオロギーという考え方が進展しないか。

巻頭にも記したようにひとつの建物のみで省エネルギーだけが考えられていることに原因がありそうだ。それ以上に、日本人の家を所有することに対する意識の違いもあるだろう。安く早くできてカッコいい家が欲しい。そこによく省エネルギーというテーマが入ってきたが、あくまでもランニングコストの軽減という実利が見えている。

地中海沿岸はともかく、寒冷地に近いヨーロッパでは暖房とそれにかかる経費、そして環境汚染が重要な課題であるが、気候が温暖な日本からは考えにくいかもしれない。しかし、今後の地球環境を考える上では重要な視点だと思う。

ヨーロッパの冬と日本の冬は違う。もちろん夏も違う。そのような自然環境の中で、闇雲にヨーロッパの基準を当てはめることはできないが、縦に長い日本列島をいくつかのゾーンに区切り、それぞれに相応しい条件付けでは形式的過ぎやしないか。それぞれの土地にはそれぞれの自然環境があり、それとともに生きる知恵を先人たちは培ってきた。そこに学ぶべきものは限りなくあるのではない。数字だけではない、大切なものがあるはず。

もう一つ大切なこと。それは国の基準は最低限の基準、望ましい基準をつくっているのが民間であること。政府が主導する基準を超えて、われわれ日本の気候風土と歴史や文化、そして生活様式に相応しい環境保全対策基準をつくるのは、どんな民間組織なのだろうか。



「ツアー」と銘打ってもお遊びが半分近いというツアーも多いようだが、今回の行程表を見たときに、これはなかなか内容の濃い研修ツアーであろうとの予測はついた。工場見学、事例の見学など盛りだくさんで、観光の時間などはまったくなくてよかった。

新しい世界が開けたけれども、なんとも密度の濃い、ヘビーな視察であった。21回目というのも、またリピーターが多いのも頷ける。世の中は常に動いている。その中で、環境に関しては最先端の国々の現状と直に接することができるのだ。よりよい環境をつくるために妥協は許さない。それがヨーロッパの基準を制定している「民間」の姿勢だ。彼らはつねによりよい世界を求めている、それをヨーロッパの人たちが支持しているのである。

今回のツアーの参加者は工務店関係者が多かった。おそらく2020年の真の省エネ基準を見越して、プレハブメーカーの商品と差別化する方法を研究するのが目的だったのだろう。それが実ることを応援したい。

「すべては現場が頑張ることから始まる。」そんな意気込みを参加者の人たちから感じる事ができた。ありがとうございました。



ツアー後記

ツアー中、唯一の観光は2日目に訪れたスイス漆喰メーカーの社長が強く推薦するピラトゥス山への登頂であった。アルプスの景観を期待して、ルツェルン湖畔の町からロープウェイで頂上まで登る。雨模様ではあったが、登るほどに視界が明るくなってくる。頂上に着いたら雪が降っていた。明るかったのは雪明りだった。もちろん、360度開けた展望はすべて雲に覆われ、寒さに震え…。これもまた楽しい登山である。
イケダコーポレーションに感謝！



Writer

ライター

中谷正人 Nakatani Masato

建築ジャーナリスト

新建築社『住宅特集』編集長や『新建築』編集長などを歴任し、現在建築ジャーナリストとして活動している